

錯覚と志向性の存在論

—オッカムによるアウレオリ批判をめぐる—

横 田 蔵 人

1 はじめに

哲学が「驚き」を糧とする以上、錯覚現象は哲学者にとってつねに魅力的なできごとである。例えば、アウグスティヌスは『三位一体論』第11巻の知覚論で、錯視や錯覚を単なる例外的な感覚なのではなく、むしろ感覚認識の、ひいては我々の認識全体の構造を解明する糸口だと見なしている。外的事物を捨象して純粋な視覚作用だけを抽出する役割を、錯覚が果たすからである。これから扱う14世紀のペトルス・アウレオリとウィリアム・オッカムとの議論においても、錯覚現象は孤立的な問題として扱われているのではなく、むしろ心の志向性を考える端緒になるケースだと見なされている。両者の間の最終的な争点は「心の志向性の終点となるような或る特別なタイプの対象を認めるか否か」であり、志向的な存在者を擁護するアウレオリにとって錯覚現象の存在は重要な橋頭堡となり、他方、拒否するオッカムにとっては厄介な障壁となりうる。本稿では主に資料的な制約から、攻撃側であるオッカムを中心に検討を進めたい。以下、アウレオリの主張の要点を示し、これに対するオッカムの批判を提示し、これに対する疑問点とその解決を示したい¹⁾。

2 アウレオリの主張：感覚知覚には志向的に現われる対象が必要だ

ペトルス・アウレオリは「現われるもので在ること *esse apparens*」という概念の作者として知られる²⁾。この概念は、彼が認識一般に与えた次のような定義を表現している³⁾。

cognoscere = habere aliquid *praesens per modum apparentis*

すなわちこれによれば、認識とは何らかの対象が心に「現われる」こと、あるいはそのような仕方です「与えられる」ことだとされる。アウレオリがこのことの証拠として持ち出すのが「錯覚」である⁴⁾。そもそも錯覚とは誤った感覚のことである。しかるに、感覚能力におこるどんな活動であろうと、それが感覚の活動であるというかぎりでは同じ本性を有しているはずだ。そうである以上、錯覚と知覚とに共通する特性をあげれば、認識の本質的な規定が得られるはずだ。実際、この点で感覚は「命題 *enuntiatio*」に似ているところがある。例えば「ソクラテスが笑っている」という命題は、命題としての意味の同一性を保ったまま、外界の事態の変化に応じて真になったり偽になったりする⁵⁾。言い換えれば、真偽は命題それ自体の意味の同一性にとって非本質的である。同様にまた感覚についても外界の事態の変化に応じて、同じ「現われ」が正しい知覚になったり、錯覚になったりする。こうして、いわば現象学的に抽象された「現われ」それ自体が、あらゆる感覚活動にとって本質的な特性だとされる。

しかし、錯覚において「現われる」ものとは何で「ある」のか。例えば、船が陸地から遠ざかるにつれて乗客に陸地の木が「動いて見える」とき、そのような「運動」はどのような存在を有するのか。アウレオリの規定は次のようになる。

motus apparens
 = NON EST *realiter*
 = EST *intentionaliter*
 (secundum *esse visum, esse iudicatum, esse apparens, esse obiective*)⁶⁾.

上述のとおり感覚活動の本性は、その正誤に対して中立である。それゆえ、正常な知覚が心の外へと向かう非反省的な活動であるからには、錯覚もまた観察

者自身の心の性質や活動へ向かう再帰的な活動ではなくて、むしろ非反省的に対象へと向かう活動だと考えられる。したがって、見かけ上の「運動」は乗客の魂のうちに刻印された作用や性質という「ありかた」をしているわけではない。かといって、外界の陸地に本当に実在しているわけでもない。少なくともこうした運動は、知覚の対象として心に「現われて・ある」のであり、また視覚によって「見られて・ある」のである。それゆえ、こうした資格においては「ある／存在する」と言われることができる。こうした存在をアウレオリは、例えば「対象としての存在 *esse objective*」と呼ぶ。形成過程の複雑なプロセスの内実に踏み込むことはできないが、こうした「現われ」は、ただ単に外界から投げ与えられるものではなく、むしろ認識能力によって作り出される存在の様態であるとされる。ちなみに、正常な知覚の場合に、そうした「対象としての存在」が遮蔽となって、心の外界への接触が妨害されると思われるかもしれない。けれども、アウレオリはこの点について殆ど疑念を持っていない。彼によれば、正常な感覚の場合「対象としての存在」における事物は「実在的な存在」における本物の事物と「重なり合う *coincidunt*」とされる⁷⁾。それゆえ、正常な知覚とは、実在的な存在における事物そのものが、心によって作り出される「現われ」という様態を介して、そのまま心に現われている事態を指していることになる。

3 オッカムの反論：アウレオリの主張の問題点

以上で見たように、アウレオリにとって「錯覚」とは知覚の例外的なケースではなく、むしろ知覚の本性が志向的に「現われ」る対象を必要とするということ教える特権的な事例となる。これに対して、オッカムは『命題集注解』第1巻の最も遅くに書かれた箇所である第27区分の3問で、アウレオリの説を直接引用した上で対抗弁論を行う。オッカムの批判は大きく二つに分かれる。前半部では、アウレオリの理論が「正常な感覚」の場合に不都合を持つことが指摘される。この批判は五個の議論から成るのだが、いま次の二つの論点を取りあげよう⁸⁾。第一に、アウレオリの主張は矛盾律に反しているとされる。も

し正常な感覚経験において「対象としての存在」における事物と「実在的な存在」における事物とが実在的に重なり、同一のものなのだとしたら、一方が存在し、かつ他方が存在しないことは論理的にありえない。ところが、これはアウレオリの主張に反している。アウレオリによれば、事物の存在非存在にかかわらず、「現われ」は成立するはずだからである⁹⁾。第二に、アウレオリによれば、正常な知覚の場合、外界の事物が直接的に把握されるとされる。すると、正常な知覚は「対象としての存在」における事物と「実在的な存在」における事物という二個の対象を持つのだろうか。そうだとしたら、二個の対象のうちどちらか一個は「対象としての存在」を伴わない外界の事物である。すると、そのような特殊な存在は無くても済む。そうでないとしたら、どちらか片方だけが対象である。「実在的な存在」の側であれば「対象としての存在」は余計である。他方、「対象としての存在」の側であれば、感覚は外界との直接接触を失ってしまう¹⁰⁾。それゆえ、少なくとも正常な知覚の場合、アウレオリの言うような存在様態は無駄である¹¹⁾。

4 認識語の文法

オッカムが「錯覚」に関わるアウレオリの理論を批判する後半部のテキストを見た時、すぐに気がつくことは、彼が認識に関わる「語り方」に注目していることである。オッカムは認識にかかわる用語が、今日の哲学用語で「外延性 extensionality」を持つか否かに応じて、異なった振る舞いをすることに気づいている。

4.1 認識語が外延性を持つ場合

アウレオリが「志向的な存在」あるいは「現われるものとしての存在」の一種だと判定した「見られている esse visum」という語句を取りあげよう。オッカムの考えでは、こうした語句は、それが個体を代示する名詞ないし記述句を主語とする場合には、第一に、次のような意味で「外延性」を持っている。

(1) 当の語を述語づけられた主語の「実在的な存在」を推論してよい。

主格の名詞を主語にして、認識語「見られている est visum」を述語づけた単文が与えられたとき、自然本性的には¹²⁾、当の単文は名詞の指示物が「実在する」ことを含意する。例えば「この男が見られている」という文は「見られている或るものが実在する」という文を含意している¹³⁾。第二に、オッカムは『詭弁論駁論注解』で次のような推論を許可している。このことから彼がこの種の認識語をどのように考えていたのかがわかる。

あなたは覆面をした男を見ている。よって、覆面をした男が見られている。ところが、覆面をした男は、実はソクラテスである。よって、ソクラテスがあなたによって見られている¹⁴⁾。

このとき、観察者が「覆面をした男」が実際に「ソクラテス」であることを知っているか否かは無関係であり、問題なのは単称名の指示物である外界の事物が同一であるか否かである。つまり、

(2) 当の語を述語づけられた複数の主語が同一のものを指示するならば、それらの主語は互いに置換されてよい。

こうした二種類の外延性において「見られている esse visum」は他の心理的でない述語、例えば「白いものである esse album」とまったく同じ性格を持っている。けれども、「見られている」という述語には「白い」のような述語とはまったく異なる点もある。「白い」のようなタイプの述語は、そのような述語づけを与える根拠となる形相「白さ albedo」が、述語づけを与えられる基体に実在的に内在しているという意味で「内的な命名 denominatio intrinseca」と呼ばれる。これに対して、「見られている」のタイプの述語は、述語

づけを与える根拠が基体に内在していないという意味で「外的な命名 *denominatio extrinseca*」と呼ばれる。「見られている」という述語づけは、アウレオリの主張するのとは違って、事物に何らかの「存在」を付け加えるわけではなく、むしろ、そのような述語づけが成立することによって表現されている「存在」は、当の事物を「見ている」ような活動が観察者の心のうちに実在的に存在しているということだけなのである。したがって、自然本性的には、「見られている」という述語づけを構成している存在者のすべては、(1) 実在するこの男という実体、および(2) 誰か或る観察者の心に生じた「視覚作用 *visio*」という性質のみである¹⁵⁾。それゆえ、「見られている」ところの事物が実在しない場合には、そもそも何かが「見られている」ことはできない。

ここで、オッカムとアウレオリの差異を際立たせる問いを立ててみよう。いま仮に「見られている」が述語づけられるような外界の事物を括弧に入れて、各々の視覚作用だけを抽出したとしてみよう。その場合にもやはり何かが「見られている」だろうか？

オッカムによれば、そうではない。括弧入れが行われる前に心がそれによって或る事物を「見ている」と語られたような視覚作用と、それによって何か別の事物を「見ている」と語られたような視覚作用とは互いに異なるものだということはたしかに認めてよいであろう。各々の視覚作用は、言うならば「白さ」と「黒さ」が互いに内的に異なる性質であるのと似た意味で、互いに内的に異なる性質である。このとき、視覚作用どうしの異なりを決めているものは、各々の作用の対象がどのようなものでなければならないかという充足条件である。このかぎりでは、各々の視覚作用は特定のタイプの事物に対して「方向づけられている *directed at*」とは言ってもよい¹⁶⁾。しかしながら、個々の視覚作用が特定のタイプの事物を充足条件としているからといって、そのことに基づいて、何らかの内的な対象が視覚作用に与えられたり、現われたりするということはまったくない¹⁷⁾。だから、視覚作用によって何かが「見られている」ためには、当の視覚作用の存在に加えて、「見られている」が述語づけられるような外界の事物の存在が必要なのである。視覚作用があるだけでは、何も「見られ

て]はいない。そして、ひとたび「ソクラテスが見られている」という述語づけが成立したら、この文からは、例えば「或る男が存在する」とか「プラトンの先生が見られている」が導き出される。このように「見られている」という語句を含む文は、外部世界を巻き込んでいる。

4.2 認識語が外延性を持たない＝内包性を持つ場合

次に、認識語が従属節や不定法句 (dictum) を伴う場合を考えてみよう。例えば、火のついた松明を振り回した時に「炎の輪が空中に在るように現われる」とか「そのように見える」というような事例である。オッカムによれば、こうした文は本当のところは、感覚の作用ではなく、知性が行う判断と信念を表わしている。つまり、知性がそのような心的命題を形成し、かつそれに同意しているのである¹⁸⁾。このように理解された場合、認識を表現する文は次のような意味で「内包性 intensionality」を持つ。第一に、そのような従属節は、その従属節それ自体の真偽を合意しない。例えば、「炎の輪が空中にある」と判断しているということだけからは、現実には「輪が空中にある」ということは帰結できない¹⁹⁾。第二に、そのような従属節内の語には「ライブニッツの法則」は適用できない。例えば、次のような推論は妥当ではない。

あなたが「この覆面をした男が近づいてくる」と判断している。ところで、この覆面をした男はソクラテスである。よって、あなたは「ソクラテスが近づいてくる」と判断している²⁰⁾。

というのも、結論の従属節は最初の命題の従属節とは異なる内容の信念を表わしているからである。以上のように、判断の従属節は、外界の事物のありさまに関係なく、それ自体の内容へと閉じている。

4.3 アウレオリの「錯覚」

したがって、錯覚経験が、感覚の行う単純な把握のうちに置かれるのは不適

切であることがわかる。「陸地の木の運動は実在しない、けれども、木の運動は見られている」という語り方は、オッカムによれば「見られている」の語法が持つべき外延性に反している。いかなる「運動」も存在しない場合には、いかなる「運動」も「見られて」いない。他方、判断の場合には「陸地の木の運動は実在しない。けれども、陸地の木の運動が存在すると判断され、その判断に同意がされている」という語り方は許される。なぜなら、判断や信念は内包性を持つからである。アウレオリのように「運動が見られている」とか「炎の輪が見られている」という語り方をしてしまうと、主語が表わすものがどこかに（心の中に？）何らかの仕方で（志向的に？）存在させられるかのような印象を持ってしまいがちである。けれども、そうした印象は、オッカムによれば、言語の誤った用法に基づく錯覚なのであり、こうした錯覚を避けるために、これらの文は「運動があるということが判断されている」とか「炎の輪があるということが信じられている」と書きなおされるべきなのだ。そして、「神は物体である」と信じている人がいるからといって神が物体である必要はなく、またどこかに非実在的な神的物体が存在させられる必要もないというのと同様に、「陸地の木の運動がある」と信じられているからといって、そのような架空の運動がどこかに存在させられる必要はない。ただし、あくまで錯覚を「感覚」のうちに置きたいのであれば、次のような語り方が許容される。例えば「空中の輪を見ている」という文は、

実際に空中に炎の輪が存在し、それを見た場合に引き起こされるのと相似した活動 [つまり、信念] を引き起こすような把握作用、ないしは複数の把握作用が感覚のうちに存在する²¹⁾。

という意味だと解釈されることができ。この意味で「感覚が欺かれる」という表現は「感覚が欺きの機縁となる」ということ、すなわち、それを原因として「事物が実際とはちがったように判断される」ということを意味している²²⁾。錯覚を表わす認識語をあくまで「感覚」における事態を表わす語だと理解した

いならば、オッカムはこの解釈を提案している。

5 オッカム説への疑問

以上を押さえた上で、オッカムの見解に対して当然おこるだろう疑問点をあげておきたい。我々は次のような疑問を抱いて当然である。誤った判断を原因するような把握作用が感覚のうちに生じる時、その把握作用は「何を」把握しているのだろうか。(A) 実在しない「炎の輪」を把握しているのだとすると、アウレオリの説を認めることになる。(B) 何か別の実在的な事物を把握しているのだとすると、いったいなぜそのような把握が「炎の輪がある」という内容をもった判断を引き起こすのかわからない。実際、問題の把握作用は「炎の輪がある」という現在の偶然的事態にコミットするような判断を原因するとされる²³⁾。だがオッカムの用語法によれば、こうしたコミットメントを行う把握は「直知認識 *cognitio intuitiva*」と呼ばれるのだ²⁴⁾。ところが、「直知認識」とは一般に「明証的な *evidens*」知識をもたらすという性格を持つとされている。しかし、ここで問題になっているのは錯覚である。さらに、オッカムはいくつかのテキストで、或る種の錯覚、例えば、太陽を凝視した後で眼の前に残るぼんやりとした形や、松明の回転による炎の輪の知覚などを説明して、感覚器官に「或る種の性質」が刻印され、それがしばらく残留し、そしてそれが「見られている」のだ、と述べている²⁵⁾。現実には感覚器官に刻印された「性質が見られている」にもかかわらず、「炎の輪がある」という判断が生じるのはなぜだろうか。

6 疑問への解答

このような問題提起に対して、オッカムは体系立てた説明こそ企てていないが、彼から答えを引き出すことは可能だと思われる。第一に、炎の輪の錯覚において、感覚器官のうちに生じる把握作用によって「炎の輪が見られている」と言えるだろうか。オッカムが「見られている」という認識語を外延的に使用する以上、彼がそのような主張を採用することは論理的にありえない。実際、

オッカムは、自然本性的には「対象が実在しない場合」すなわち「見られているものが外界に存在しない場合」に、そのようなものへと向かう視覚作用が存在することも、残留することも起こらないと認めている²⁶⁾。それでは、あくまでも実在的なものが「非実在の炎の輪」の見えを引き起こすのはなぜだろうか²⁷⁾。この点について示唆的なのは「炎の輪」が現われているとき本当は或る性質を「見ている」のだと述べているテキストである。その箇所ではオッカムは、こうした「性質」が、当の性質を「見ている」働きの「部分的な原因」であると述べている²⁸⁾。言い換えれば、当の性質によって原因される把握作用は「複合的な原因」を有する結果なのだ。当該テキストの文脈上、想定されているもう一方の「部分的な原因」は「外界の事物」である。実際、我々は多くの場合、錯覚において単に「ゴースト」のみを見ているわけではない。水に浸した棒が折れ曲がって見えるという時、我々は棒を、その色や質感を、水を、そして水面に輝く光を見ているだろう。これらの各々はあくまで断片的には正しい情報を伝達している。加えて「刻印された性質」であれ、何か他の実在的なものであれ、我々は何であれそれが持っている形や色などの情報を正しく受理している。だが、こうした正しい情報の一部がボケていたり微弱だったりすると、我々は情報の連結に失敗し、正しく知覚された内容をうっかり別のものに帰属させてしまいうるだろう²⁹⁾。そして、情報が与えられる際の脆弱さから、そのような把握は明証的な判断をもたらさないのである。実際、オッカムは直知認識のレベルでこうした意味での誤りが生じることを認め、こうした直知認識を「不完全な直知」と呼んでいる³⁰⁾。

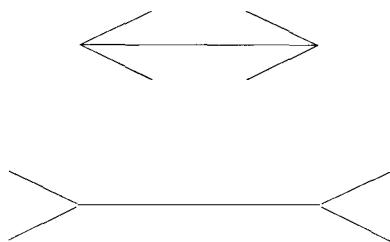
非常に不完全ではっきりしないために、あるいは対象の側の何らかの妨害のために、あるいは何か別の妨害のために、そのように直知的に認識された事物についてまったく、あるいはわずかにしか偶然的真理が認識されえないということが起こることもありうるのである³¹⁾。

言い換えれば、そのような把握は、当の事物がもたらさうな情報のうちいくつ

かのものを欠落させるのである。さらに、オッカムは複数の事物を対象とするようなひとつの直知的把握がありうることを認めている。複数の事物どうしの内属や場所的な配置についての判断をもたらすような直知がそれである。そして、このような直知が微弱であったり、あるいは何か妨害があった場合には、こうした直知は誤った判断をもたらすとされている³²⁾。我々はたしかに「刻印された性質」を「見ている」と言いうる場合がある。けれども、適切には見ていないのだ。というのも、「感覚器官に刻印された」という情報が欠落し、別の情報「外界のあの辺」と合成されているからである。問題の把握作用が把握しているのは、このような意味で、実在的要素から合成されたものであると思われる。以上から、筆者は次のように考える。オッカムは、感覚的な把握作用は、あくまで何らかの実在的な事物（それが何であれ）の把握であると考えているだろう。ただし、ひとつの感覚作用に必ずしもひとつの事物が対応しないような場合があると考えているだろう。もし、実在的要素からなる複数の情報が誤って合成されてしまい、その結果としての把握作用、あるいは複数の把握作用が、実際に炎の輪を「見ている」場合の結果と相似しているならば、当の把握作用は本当は「見ていない」ような「炎の輪」が存在するという判断、あるいはより正確にはもっと弱々しく「何か炎の輪みたいなもの」が存在するみたいだなあ、という自信なさげな判断を原因してしまうだろう。そして、このとき、当の把握作用は、事実と相違した判断を原因するだろう。それゆえ、錯覚現象において「現われるものとしての存在における対象」なるものを要請する必要はない。

おわりに

オッカムによるアウレオリ批判を敷衍しつつ総括しよう。例えば、二人の人が次頁のような図を見て、一人は「二本の平行線は同じ長さだ」と思い、もう一人は「違う長さだ」と思ったとしてみよう。このことは片方の人が「架空の対象」を見ているということの意味するだろうか。オッカムはこう言うであろう。実在する対象だけが見られていることと、実在しないことがらについての



判断が成立することとは両立する。実際、彼らは二人とも少なくとも同じ二本の實在する平行線を見ている。けれども、片方の人は注意不足から平行線それ自体に加えて何か別の実在的なもの（おそらくは矢印の凹凸部分）をも

同時に把握してしまい、それによって他方の人と異なる知覚作用を持ち、異なる信念を獲得しているのだろう。だからといって、片方の人によって、實在する平行線とは別に「架空の長さ」や「架空の線」が見られているということにはならない。オッカムに言わせれば、アウレオリの知覚論はこの点の切り分けが甘い。彼は感覚語の外延性と判断語の内包性を混同しているのである。もちろん、すべての錯覚事例についてオッカムの分析がきれいに当てはまるとは限らないかもしれない。しかし、いずれにせよ錯覚における志向性をめぐる二人の哲学者の議論からわかることは、中世における志向性についての存在論が、いかにそれを語る「語り方」に依存しているかということである。乱暴な言い方をすれば中世における存在論とは動詞「est」の意味論に他ならないのだと言うこともできるだろう。オッカムの議論に比べてアウレオリの議論ははるかに単純なものであるが、その反面、厄介な存在論的多層性を引き受けなければならない。オッカムの議論は一見したところトリッキーに見えるものの、存在論においてよりいっそう節約的である。逆に言えば、より節約的であることによって、漠然と混同されていたできごとをクリアに見せてくれるのである。

注

- 1) オッカムの著作はすべて Franciscan Institute の *Opera Philosophica* および *Theologica* を用いる。アウレオリの著作は次のとおり。 *Scriptum.*, prologue and dd. 1-8 = *Peter Aureoli Scriptum Super Primum Sententiarum*, 2 vols. E. M. Buytaert (ed.), Franciscan Institute, 1952-56; *Scriptum.*, d. 23 = R. M. de Rijk, *De intentionibus: Critical Edition with A Study on The Medieval Intentionality Debate up to ca. 1350* (Giraldus Odonis, *Opera Philosophica*), E. J. Brill, 2005, appendix F; *Scriptum.*, d. 9,

- q. 1; d. 27, q. 2; d. 35, q. 1 = *The Electronic Scriptum*, R. L. Friedman, L. O. Nielsen, C. Schabel (eds.), URL = <http://www.igl.ku.dk/~¥%7Eruss/auriol.html> 本論文の第二ラウンドに当たる「普遍」の認識をめぐる両者の議論については下記を参照。横田蔵人「フィクトゥム再考——オッカムの初期概念論について」『中世哲学研究 Veritas』26 (2007), pp. 43-61.
- 2) アウレオリの認識論一般については紙幅の関係から文献参照を割愛する。上記横田2007を参照。
- 3) *Scriptum.*, I, d. 35, p. 1, a. 1 (p. 7, 332-6).
- 4) *Scriptum.*, I, prol., q. 2, 3, nn. 81-88; I, d. 3, 14, n. 31. こうした方法論は自覚的にアウグスティヌスの『三位一体論』第11巻に結びつけられている。
- 5) *Scriptum.*, I, prol., q. 2, 3, nn. 90-91.
- 6) *Scriptum.*, I, d. 3, q. 14, n. 31.
- 7) *Scriptum.*, loc. cit., et I, d. 27, p. 2 (Friedman, et al., p. 16, 604-23).
- 8) Cf. OTh IV, p. 238, 19-241, 14.
- 9) *Ibid.*, p. 239, 13-240, 10; cf. *ibid.*, p. 251, 19-23.
- 10) *Ibid.*, p. 238, 19-239, 12; p. 239, 13-25; p. 241, 7-14.
- 11) 以上の批判は内在的な批判にはなっていない。オッカムは異なる「存在」のレベルにおいて同一の事物が在りうるという可能性それ自体を理由なく拒否しているからである。それゆえ、アウレオリを代弁してオッカムへの再反論を企てることができる。(東北大学の荻原理先生とのディスカッションから有益な示唆を給りました。記して感謝申し上げます。) 第一の反論への反駁。アウレオリにとって「存在 esse」とは「実在性 realitas」に付帯する様態であり、また「実在性」は種々の存在と非存在に対して中立的なものである。さらに「実在的な存在」と「志向的な存在」とは互いに異なる「存在の様態 modus essendi」である。それゆえ、同一の実在性に対して、互いに階層を異にする二つの存在様態が、同時に付帯することも、一方だけ付帯することも可能である。第二の反論への反駁。アウレオリによれば、(R) “*rosa potest concipi sine esse appa- renti*” という文は ‘sine’ を ‘concipi’ のスコープの内側にいれるか否かで次の二つの読み方をすることができる。(a) “*conceptus ‘rosa’ non concludit conceptum ‘esse appa-rens’.*” (b) “*apparitio rosae potest stare dum rosa non est apparens.*” 第一の読みでは文 (R) は真だが、第二の読みでは矛盾している。Cf. *Scriptum.*, I, d. 9, p. 1 (Friedman, et al., p. 11, 499-508). たしかに薔薇は「現われるものであること」を伴わずには知覚され得ないが、だからといって知覚されるのが「現われるものとしての薔薇」であって「薔薇」それ自体ではないということにはならない。アウレオリにとって「志向的な存在」や「実在的な存在」という存在様態が把握される「対象」なのではなくして、むしろ存在様態に対して中立な実在性が把握される「対象」なのである。
- 12) 「自然本性的には」という留保をつけたのには、例えば次のような例外があるから

- である。Cf., OTh IV, p. 549, 13-19. 神が世界創造以前に有する直知認識において、例えば「ソクラテスが認識されている。よって、ソクラテスが在る」という推論は正しくない。というのも、世界創造以前に「ソクラテスは実在しない」と「ソクラテスが認識されている」は両立可能だからである。この場合には後者の命題を真にするために「ソクラテス」の代示の範囲が可能な存在者にまで拡張されている。Cf. *ibid.* p. 546, 24-547, 6. 自然本性的に「よって、ソクラテスが実在的に存在する」という推論が成立するのは、自然的因果のメカニズムにおいては視覚作用が存在するならば対象が実在し、かつ、そのような視覚作用を原因したのでなければならぬからである。Cf. OTh IX, p. 73, 34-35.
- 13) アウレオリは「見ている」あるいは「直知している」という語がこの意味で外延性を持つことを「錯覚」を根拠のひとつとして、明確に否定している。 *Scriptum.*, I, prol., ¶ 2, 3 n. 80.
- 14) OPh III, p. 231, 27-42. Cf. G. Priest and S. Read, "Intentionality: Meinongianism and The Medievals," in: *Australasian Journal of Philosophy*, 2004: 421-442.
- 15) Cf. OTh IV, p. 243, 16-18; p. 550, 8-551, 14. ちょうど「神がアダムを創造する」と言われるためには、神が存在し、かつ、アダムが生じればよいのと同様である。Cf. OTh IV, p. 249, 18-22; p. 258, 19-23.
- 16) ここで「方向づけ」という言葉には特別に心理的事象に特有な意味合いを込めていない。例えば「対人方向性地雷 directional anti-personnel mine」とは、一定の重量に対する「選別性 selectivity」を持っており、一定の重量が加わった時だけ起爆する地雷のことである。また「指向性マイクロフォン directional microphone」とは、一定方向の音だけを拾うマイクのことである。この意味で地雷やマイクが特定の条件を満たす対象への「方向性 directionality」や「指向性 directivity」を持っているということは許される。だからといって、地雷やマイクが何かを心的所与として有するということにはならないし、これらが選別している内容が非実在的な存在においてどこかに存在するわけでもない。単にこれらは自らの対象が持たなければならない一定の内容と条件を内的に限定されており、そのような条件に対して選択的であるだけである。
- 17) 周知のようにオッカムは神の奇跡的な介入によるならば、外界に実在しないものについての直知認識が可能であることを認めている。Cf. OTh I, p. 38, 15-p. 39, 7; OTh IX, p. 605, 34-35. オッカムは「色の感覚的な視覚」について「その活動の第一対象が実在しない」場合であっても論理的にはそれが成立しうるのだと述べて、この時、視覚作用は「色を第一対象として色へと限定されている」と言っている。Cf., OTh I, p. 39, 11-12. このとき、対象は存在しておらず、かつ、視覚作用は当の対象への「方向性」を維持している。だからこそ、そのような視覚作用の結果として「当の色は存在しない」という判断が原因されることになるのである。
- 18) Cf. OTh IV, p. 246, 12-19.

- 19) Cf. *ibid.*, p. 246, 20-247, 10.
- 20) Cf. OPh III, p. 239, 78-240, 87.
- 21) Cf. OTh IV, p. 244, 16-24; p. 245, 12-246, 4.
- 22) Cf. *ibid.*, p. 251, 15-17.
- 23) オッカムは、視覚における把握作用がすべて「直知的 intuitive」であることを示唆している。Cf. OTh VI, p. 110, 13- 111, 3.
- 24) もし「存在と非存在に関係のない判断」を原因するような把握であるならば、それは抽象認識であるであろう。なるほど、オッカムは有名なテキストで、神が知性のうちに「信じる活動」を原因し、この活動によって知性が「不在であるような事物が存在していると信じる」ということが可能だと述べた後で、このような「信じる活動」を「直知認識ではなく抽象認識である」と述べている。Cf. OTh IX, p. 498, 72-76. これについては E. Karger, "Ockham's Misunderstood Doctrine of Intuitive and Abstractive Cognition," in: *The Cambridge Companion to Ockham*, ed. by P. V. Spade, Cambridge: Cambridge University Press, pp. 204-226 の解釈を支持する。オッカムは、命題の形成や命題に対する是認の活動のような「複合的な認識 *cognitio complexa*」つまり命題に関わる認識を「抽象認識」と呼ぶ場合がある。Cf. OTh V, p. 257, 9-20. それゆえ、神が直接「信じる活動」を原因するのであれば、それはこの意味で「抽象認識」と呼ばれてよい。他方、今問題になっているのは、命題の形成やそれに対する同意を原因するような感覚知覚レベルの「単純な認識 *cognitio incomplexa*」に関してである。
- 25) Cf. OTh IV, p. 250, 3-8; OTh VI, p. 109, 4-5. 9-12; OTh IX, p. 606, 52-55.
- 26) Cf. OTh IX, p. 606, 46-47. 61-63.
- 27) オッカムの同時代人であるチャットンやウォデハムは、先に述べた「外的な命名」によってこれを説明しようとしている。眼に現に炎の輪が「現われている」あるいは、現に炎の輪が「見られている」という事態を成立させるためには、輪が実在するか否かにかかわらず、魂のうちに炎の輪についての視覚作用が成立すればよいのであり、それによって「炎の輪が見られている」という文が真となるのだという説明である。Cf. Chatton, *Reportatio*, prol., q. 2, a. 2, sec. 6, p. 88, 73-75; Wodeham, *Lect. secunda*, I, a. 4, sec. 3, p. 89, 52-70. オッカムがアウレオリを批判する箇所では「外的な命名」を用いている事例は、どれも命名される基体が実際に実在する場合であると思われる。Cf., OTh IV, p. 241, 15-242, 7; p. 243, 14-22; p. 249, 10- 250, 2; p. 250, 3-251, 8; OTh IV, p. 533, 26-534, 3; p. 550, 8-551, 3. もしこのような見解を採用した場合、視覚作用は、対象が実在する場合であれそうでない場合であれ「対象の見え」を作り出してしまうことになるだろう。これはオッカムの見解ではない。また、「見られている」という述語が、対象が実在する場合には単に当の対象を基体とした附帯性のみを表わし、対象が実在しない場合には自らの基体を作り出すのだ、と考えることは不条理である。アウレオリはすでにこの見解の難点を示唆している。Cf. *Scriptum.*, I, d. 27, p. 2 (Friedman, et. al.,

- p. 16, 593-17, 603); I, d. 23, n. 48 sqq. (De Rijk, p. 710 sqq.); I, d. 3, q. 14, n. 56 (Buytaert, I, p. 713, 31-42).
- 28) Cf. OTh VI, p. 111, 9-112, 6.
- 29) オッカムは対象となる外界の事物から眼球に至るまでの角度や経路に応じて、認知情報の一部に遺漏や脱落がおきることを認めている。Cf. OTh VI, p. 95, 10-97, 8. そのような場合、知性は当の事物について「直知認識」を持っているが、しかし可能なあらゆる情報についての「直知認識」を持っているわけではなく、それゆえ、自己の判断に確信を持ってないのである。Cf. *ibid.*, p. 97, 9-17.
- 30) Cf. OTh VI, p. 112, 2. オッカムが「不完全な直知 *cognitio intuitiva imperfecta*」と言う場合には、過去の事態に対する直知認識のことを指す場合もある。Cf. OTh V, pp. 261-267. ここではこの意味ではない。
- 31) Cf. OTh I, p. 33, 8-12.
- 32) Cf. *ibid.*, p. 31, 17-32, 3.